

Inches
1
2

19

18

17

16

15

14

13

12

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

Centimetres

Kodak

LICENSED PRODUCT

Black

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
TAMBA JAPAN

へ13
2913
22

昭和九年
七月六日
東京

貞操婦女八賢詩 七編中

村田

東都

爲永春

永編次

第四十三回

大井の里の船月十金と極り
大井の里の船月十金と極り
大井の里の船月十金と極り

前話休題 草表呂草の獵師 細六の生活のさめあそび
前の日入の雀を捕まえて 船のうらみあつた水路 遠く六浦の
塋の浦の船行ふ 瀬戸と 例崎の 昨今思ひがけの三
戦ひあつて 強動大さうらぶまはる 遠山多は 袂さけん 邊の
だて門をさうて 漢りるんとすんくもあつねは 輝の不便に
女八賢詩の二

然るに這の空骨をわらうと一と獨り面のこもくせでも亦
詮術もひらぎるの船を禁島の捕船の備ひに
此船をま選をり越つねのよう便宜を失ひしが皆止
へまよゆらぎる陸路を古郷へ歸らんとせしめいさう思ひ
よものまゝ其日此地は通苗一次の日未明の禁島を
立てまよより急ぐ路次はわらねが谷生の下旬の遅ざら
霞のゆる野の山は越る心も長閑くて袂暖き春風ふるの
若草色をて身を入置入煙くと踏ざらよと道なき道で
まご立陽炎のそまらゆるぬる煙とあゝ煙煙管の良きえ

旅の勞を忘る草その戯員に日も閑て稍黄昏み近き
この品草村の遠くぬ船口の渡の河原み来みけり
そのとき船の這岸はわらむと向ひの岸に着てはるあどと
折返しと私語り見ゆる方に茶店あり是幸いと我を
入り簀床の腰をうち掛て須臾憩らふ其折も我より
先此茶店のあるト簀床の休らひ一才の單ぬ一人の
處女容貌の賤くらぎる此辺こそりの者と見へどり
井皿兒の城中なる某どの處女らびの鎌倉近き大
家の嫁を思ふものくら伴当え連の人えはらふと七歳の

お笠の其上に花田紋の小包を乗せしる俣小尻に
物思六しき面容ありし小那細六が旅包もあまどく花田
絞りにそ拾裕ともみよく似たるを細六の心もつるの小
包と竝べ置て呉りの處女の顔その世に美麗とも思ひ
けん他目もあらざりけりうらも船の着しこゆに
細六うら破き乗りほきて大度とそくりにて茶代を
拂ひ我旅包と思ひ遠へて竝んでありし那處女の小包を
稍携へて船場をさうて弛行しを黄昏時の夏るまに
處女も心やつらざりけん後より遣ひもあつねる細六のあ

氣もつらむ船て船口の渡りを越へて十町をうも歩み
あら持方へ来りし旅包をよくり見まへるのふあな花
田の風呂あへ包こし形きえよく似まじど我旅包のふ
がまへ牙々うら持ひし中を見りより又仰天とら
誰何と呆まじか忽地ふみあひ入り備ハ先刻の小處女ハ
顔の似合ぬ盗人あて我由断せし其間ありの小包と携り
替しり夫とも心つらざりし鈍くも這所まで携へ来りて今
あて返せばとて箇程の伎倆をさる奴が何時まで那所の
ふ店の居るさうの旅包へ惜しけりともよくや日も暮りて

夜圖を居らぬと知りしに、
前口まで解つて入るるを
限りあり、噫、是非もなかり、
昨日の野嵩へともかくと
空骨折ゆゆくのまゝ、今日ハ箭口で此始末惜や包と替
らまゝ前後二日の大損ハ夜細半月引へともかく、
變でいふ、然ハさうもなかり、是もまゝ、約束りも、御もな
此替らまゝ、小包も、
持行て、獨りゆかり、
舟をり脊中にうち負ひて家路をさうして急ぐ、
初更に近きころ、品草村より、
大井の里まで

来し折しも、
連て這方をさうしてある者あり、
路の傍に、
十名とあり、
六十才とあり、
立せて歩み、
伯母も、
ゆき顔見合せ、
文賢五輯の二

こゝと互ひの側へ近寄りて左様なるなりト夥兵等が
あつてあつて推隔し其一群の中より一名の頭人と
思ひまゝ野袴の裾ひらけり執する声せり立てたれ
壯俊元礼みせと今此婆々り言活の松子婿へ嫁へ後て
聴く品草の獵師細六はほまは稟せトゆめり氣ふ
同くは細六平伏のまゆり仔細なれども我名を借む
よりのまゆりまぐ轉く胸と推接り旋のまゆり私奴の品草
村の獵師にて名を細六と喚り者昨日野島の浦人
より細引の野為に雇ひて出行く途み残りてまゆり

頼一此伯母にのりたる外にて半言いせど頭人の怒り
眼を見開きて俺を蹴ふらうらうら外なるまゆり者も索うらうら
罪の次身と聴きつべ此場みあつて言ひ所せん隊兵は登
逃まるといふげりま下知小夥兵等六略と志て五六名も
左右を捕ととぐりゆり映く細六の公も文に身みそら
陸路をたどる居りける登時件の頭人の扇を膝に推して
はく女をま細六よく所ね俺の當所の眼代めて稲毛の跡奈
をを構へし船月与伊太度寧ろり聞に此松金澤の洲先
繩の松原にて管領さぬ小姓を二處女思ひの外に



多強くて了にま場の取逃し次の日瀨門に隠居しを
見付出しと忽地の討隊の人数を對らしし渠等ら不
義の切衝ありて雲を起し雨を降らせ又ま場をも攻抜
たり只その中めて二名の處女の逃匿ししを村田くさ折
兎栗も作がお梅お道の首と披露し洲先の糸へ果し
ども寔二名が首や否や甚のりて合点ゆるご夫ゆゑに
此迎も穿後巖し折も折餘が家の昨日より怪しき處
女を二名まで突の一室に隠居盡くし折とひとし莊官方へ
徐伯母を喚寄せて輝の寔否を問ひせど尚左右と物望
陳トて更ふその寔を吐ね止むを辨げ縛縛て餘が家の伴
さひゆき有を言ひせどりの處女を捕捕んと思ひし
らど餘み出會しり然つみ餘が言話の端に埜鳴の浦へ
行しと言へば餘も基より處女等た深き由結のひる者で瀨
門と洲寄の戦ひも渠等が為ふ助劍し七輝の破れ
たりし二名の處女を我家の隠居盡くせしものたらし
仔細具ぬ招了せし尙毫たりも偽らば苛き見せんと
言示せば左右ぬ扣し夥兵等も奈何くと信声ぬ喚つ
るひりりりと十の下の細六の最周章する声あり

かそ刀 你们 多し 俟之 俺等 基し 獵師 して 他
知己も 多き 身ゆ 處女 由縁 へい 況て 彼等
其の 戦ひと 軍と 鏢三 文も 多し 何れ 助
劍の 一も あり 俺等 昨日 野島 空骨 折て 飯り
路苗 ちふ 處女 と 躲居 左極 あり 更に 存せ 此
たろ べお 許容 せと 言ふ せう 船月 与伊 太細 六が
顔 泣く ぐと 打視 あり 壯校 陳む 赴き 訝し けき ど
今言ふ と 多し 小 憐れ 多し 俺が 吩咐 仔細 あり 甚
よくも 怒る やと 言ふ して 細六 思案 あり び 形勢 あり

存せ ねど 身に 慥ひ ます 急度 吾と 六の 入さ ぬ
か 争う 不の 字を 中と べき 此身 の 疑ひ 晴る 中う あり び
整あ の らん と言ふ 与伊 夫の うち 貞 頭 此 一 言 活と 和ら
げて 仔細 と いふ 他を どの 假令 你の あり ども 你が 家
躲居 二女 才に 置ら ぬ 少女 ども 不 思案 の 幻術 あり
うん 多し くの 門て 悔ま ぐう 余の 言ふ 夫の 知る 處女
俺今 多勢 を 引連 進 行 前 後 左 右 を 捕 囲 ま 捕 捕 ん も
と 死 ぬ ねど 第一 荒立 て 取 逃 ぎ ば 時 悔 ゆ も 詮 術
今 你 渠 等 に 由 縁 を 證 拠 と 俺 に 見 せ ん と 多し ば

渠等二名を欺きて捕捕とも首討とも二ツの一ツの働
きよ此の密く仕あせむる伯母が命を助くるのより
美の望まふはまへト言ひきて細六うち按一りや
是の大後ろぐら褒美とひまむ野暮るるは昨日埜島の
空骨と今日箭口での損毛を報るはゆりのでいりませ
余の言多勢で捕巻てもも思ふぬ處女等が首討て
来ようとの命を的の働まふ迹の褒美の面白らむ金
先立世の中へ握らぬうち智恵も出で只夫のまふは
とて假令眼代さぬらりとて約束多替料られぬ憑り

うき恩賞と当の命が換らるる金に相場へ下直とも今
前金に賜らるるその勢ひにて處女等を二名が二名は捕
備ふの除らる首めしてくるる貴君へはまはしその
代りぬの遠伯母を伴成然る夫またの遠へは遊技の人
質に刀俵へお預けやませう悠ては奈何とも向へよ
保太の所つうち咲て思ふは倍する俵が太監その氣性
てはは損らるるまひ命の望まはせんと言ひは懐極き
まぐり小圓十兩取出してとるは鮮少の金も今持合せの
薄けまむ当座のふけにまむる首尾よくお柄をせ

うゑの今此金に十倍まゝに寝衣をせうきりし教らるべし
工を疑ふ変りいと言ひつゝ適とせ積取て自が財布の
うち収め命代りぬ十兩と云ふ隙りと云へ下道をはずり
適莫も付と云ふうらゝ今まゝ居立言ひごと一殿兵前
名貸りの之竊る我家へ至ぬの程もあらず吉左右せ
うらゝお知らせ中きんと言ふよ与伊太のよらとびて一名の殿
兵を擇み出さるの細六は従がらせ休きぬうらゝひつり
けきと集まると既ぬ幻術あり端りと捕を逃しと云ふを
烟六所ぬぞ幻術と云ふ邪法せうのうらゝ術のうらゝとも欺さる

頼ぐよ柄とせんぬ公易く思ひしと云ひつゝ殿兵を
従へて右に揺る小包を其傍寄みうち負ひの胸ぬ
以按の有明の月まご出ぬ宵闇ぬ俺家の方へと急ぎりる

第四十四回

一頭乍来て眼代を暗まひ
漢舟了去て意未詳なり

却説船月与伊太度寧の細六が迹見送りていと嘆
氣よりち頷き那細六が形勢を見るぬ顔ぬ似合ぬ太
膽不敵寝義と圓より勿地ぬ命に換ても處女等を
捕捕んと拾言ひ一言乗現在伯母と人質ぬ顔けりの

戦兵まき伴の行一ふりふりよも仕換トハあるべうふい金言
六辺の野中より集芳が吉左右候んとそまご春寒き夜を
込りて草木と俱ぬ立明さく可惜此身の風邪とやひらん
這野より程も遠くぬ砂水村多村長が家ののうりて
相候へ一隊兵老女と引立さやと言ひり先ぬ立やふ
略と忘て戦兵等へ再び老女を趕まらぬ砂水をさうてゆく
道も表や婆の血の泪悲しき中にも思ふやうに海がさき
細六が日比ぬ似氣る強欲心金にさうの迷ひよりまぬ付
ても梅さぬの心身小病着るさるるぶ介の案あひぬらぬ

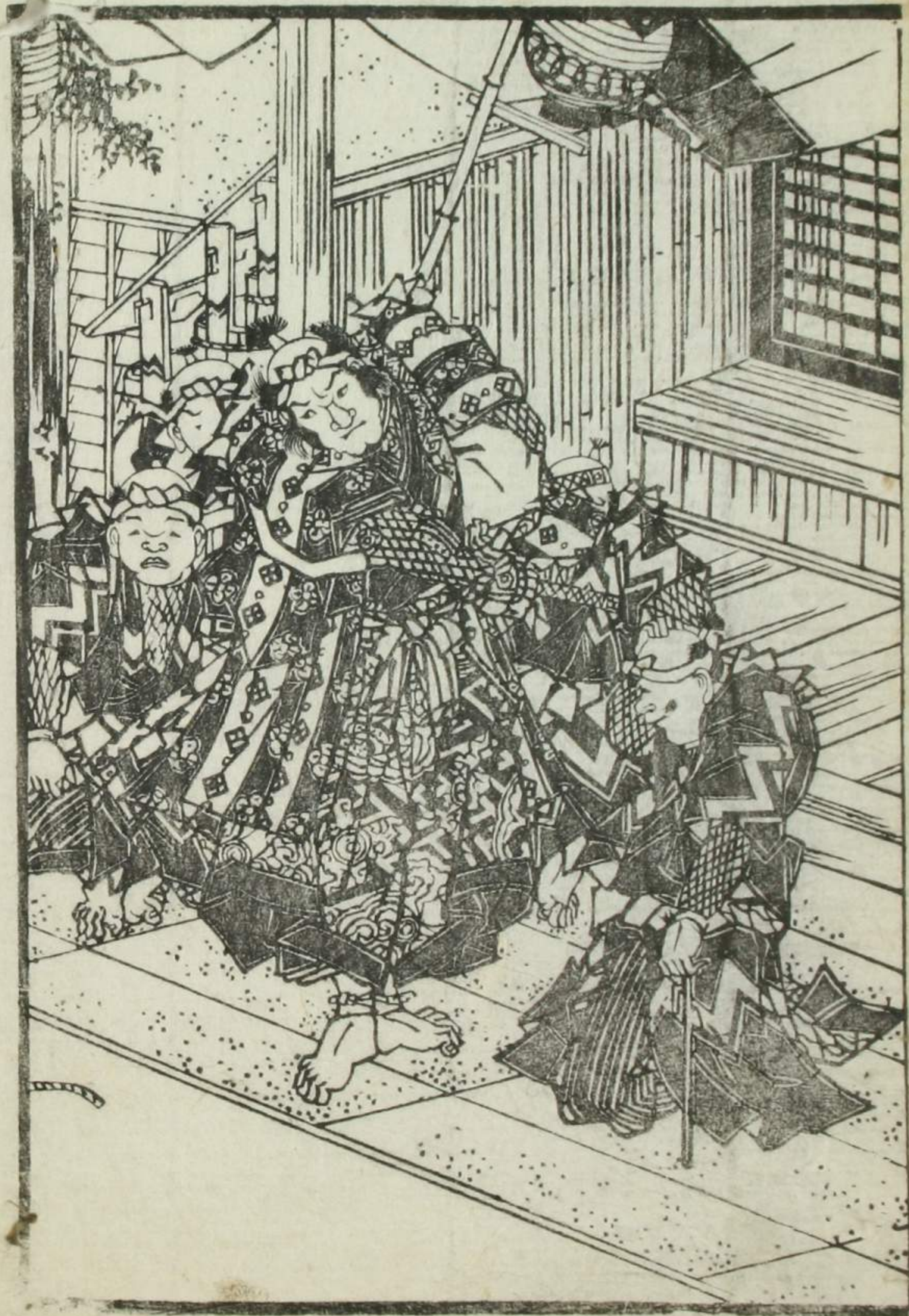
荷て加て腹さぬ道さく逃けき路次と王児まを薬取
買の行のぬらぬの運もぬ湯火途中に凶のふりり
候令途中ぬらぬの運もぬ湯火途中に凶のふりり
在るも病苦ぬ悩む梅さぬがかん身の加とりのぬらぬ
人非人の細六がは候の買ぬ掛らとて可憐かん身とお二言
とも失ひぬらぬのやあらんそ争らせんぬ梅せうとまらぬ
只有や死やの関りもも縲縄索解けぬ思ひを言へば
そ小岩間の清水まらぬを瀧をを泪拭いんとぬらぬ細さ
如意らぬ身へ脊心の死も蟹横ぬ這のねど細経と旅ぬ

りしとて
監元 踏もりつ 砂水村 村長が 家せま せむのりつりける
余程に 船月 与 浮太 度寧 一 件の 老女 を 引立 砂水 の 村
長が 家へ 赴ま するの 細六 が 吉左 右を 今り くと 俟程 二更 の
鐘も 稍も 子 の 刻 近く あり くと 更の 細六 が 音信 なく
夜は 多し 次第 に 更なる ほど 与 伊太 へ 入り ありて 疑心 せしめ
諸の 件 の 細六 奴が 身付 の 金を のの せんと 熟く も 俺を
欺き するの 處女 を 捕合 せむ 刺へ 置か せむ といふ 元
介 婆を 俺を 不仕 せ 出奔 せし せむ といふ 元介 余も 知る
われ 珍細 あり 先 這 婆が 首 討 落し 其後 處女 と 細

捕 捕んと 敷 圍つ 馳て 老女 を 引合 せむ 刀 の 柄 ぬき せ
て 首を 切んと する 折しも 息 助り せむ 近來 細六 怒ら
し 声と あり 立て 刀 拵 まが 怒つ せむ 細六 お 梅が 首を 討と して
剛ら 持 齋 は せむ といふ 河 急 迫く 流る ほど 執ぶ 与 伊太 狭く
老女 を 引合 せむ といふ 須臾 言 活も あり くと 与 伊
太の 女を 引合 せむ 刀 の 拵と 俣 俱し 怒り を あさ めて 形
容を 正し 右に 取ら 丸骨 の 扇を 易に 三 細六 徐か
家へ 歸 居し 處女 の 既の 二名 あり せむ 梅と 中ん 一個を
討 留 残る 一個 の 逃 せし といふ くと 問 浩ら 三 細六 阿 容

たる氣多きく俺門の嚮の野兵荒と俱に我家へ忍び
 行き裡の形勢を現ふ果して一室に人声のりり言ふ
 ちんとして禮園の一個へお梅今一個へお道と喚ぶく處の
 より然るふお梅へ瀬戸村の受し瘰癧の再発して既
 枕のつまでありしが基より不敵の賊婦ゆゑ件の瘰癧を
 愈まんまお道とやうか才覚にて奈らる術のそを得
 けん最大なる壺の中へ女の鮮血を塗りしを樽へ来
 けり瘰癧口へ塗んとしける恰裕の問答ありし関へ一そ那
 田女荒の叫くやう這賊婦等が形容を問ひ見せしもの

一巻の巻のまこと
 見合のまこと
 せと
 一
 女にのらむお梅が瘰癧の悩まむ立居も自由のらぬ
 こそ此ら女もる幸ひる且件の鮮血を塗りしを樽へ来
 壺を奪ちつてお道とされへ殺害るお梅とやうの首討も
 楠柁ももる入るまづ心得之と竊中め示合せら下奴の
 脊門の方より我と入り管領さぬの泥淀ぞと云ひも終
 ころぞりの壺を先奪ちんと為らうしとお道のまこととせ
 掛て互ひの争ふ其とづつお梅の鮮血を塗りしを樽へ来
 外らる那お梅が脊中へざんぶと打ちけられ叫と一声喚ひも
 めどちちり呼吸の送ゆるめど狭くお道附入る野兵荒と



夢うけ後ろより弱腰丁と捕ゆるとお道へ強がど振
 やさき襟髪とらて投出と透間と見とる一下奴が槍の
 振るも見せむと声もけりけど次つける又先狂ふて
 お道が肩先一寸さうり次怒しを擇とも思ひぬ強氣の
 碎者俱よ双を抜持りて次りてうらも一雷光稲妻その
 早枝にゆーらひうね見とるを此ごとく少癩一箇行
 負ひのうらと這方も必死の俺們と駿兵左右ひらく村
 菟うら其勢ひよおそまてう縁ては僅しうらるる傍
 燃る田畑裏の中へ身をおどらせりて飛入りて形やう見む

かつけま六尚逃さどと駿兵流が近寄る田畑裏のうら
 下りもさらと燃え一團の猛火の面を焦さまで叫びもあど
 呼吸絶ふ猛火のうらも消やせ四辺の紙門へ燃うり又
 家の棟の燃ひうりて炎さうんあさるのうらお道が行来ハ
 尚見えねばと口惜と思へども切衝るまば詮術なくお梅が
 首と討落し一旦刀餘ふ此首を見せまらうせし上にて
 お道が穿後へ左も右も後の心下お小従へんと憤怒をまの
 ひて立飯りぬ那心見おまのぞく品草村の方れり
 猛火さうん燃ひるるハ別ち俺們が白屋うると言ひり後

方と指さすの勢へあつてか梅が首を率とて子母太が
 迎ふさうしきき遙々わつて額衝つ腰ふとさきさき
 の額の内をか拭ふ其とき子母太度寧の猛火を見
 たり又更にお梅が首を率とて取りてはくく見つ冷笑の
 かきほつた六葉のさか梅が瘡痕の悩むお道お梅の
 するの縁縁てより因お梅が今言ふ初め偽りの假令さき
 色を見よ女子の首の似しきども警鐘うみ切りしるまき
 少年の首の似しきども警鐘うみ切りしるまき
 同類もて質首せりて我を欺き御よく其場を逃さんとす
 泳きは儂でりのぬべし悠ても言解初やあるのうらと
 らは細六阿容する氣さなくとん旋ともおがへまをね那お梅
 こと去る日の錦の旗を奪りん為候小男子と姿を交名も
 梅太郎と實れし由余ままの警の種きとて澄ぬにこそ
 ろまらうのく小疑りるべき物なり此後を賢者お梅とせと
 言つて是て炎頭船月子母太自ら顔をおらげて儂の
 変もたらちよりあつて居まど休が胸中さくらん為小
 悠言ひし小疑ひもさき休が回答お梅が首の相違ある
 まへ余の言にお道と封のうらと七這所小桶縁のうらと

大賢五輯の二

出立く 縁より 俺隊兵に守らせし 未遠くの 露乃
まが 伏兵 法を けと 言ひつゝも 立んと せむを 細六が びらへ
あげよ 引止め お道が びらの 左も 右も まが 約束の 内 褒美を
と言ひつゝ 右も せさう せさう せさう 子伊太の 所ら び 首を うち 押す
汝二名が 首討が 約束 通り の 褒美も せさう んが 大さ び の お道 せ
捕逃し 一人よ ひとしき お梅が 首を 討取し とも 念を するの
褒美を 得さ せむる びら せん や 自討の 金の 十両 せ
分に 遇せむる 褒美も びら 疑ひ とも せさう せさう せさう
伯母が 命を 助け 休し 宛へ せむる べし と言ひつゝ 婆を せ

突巻りて 演ふと せさう せさう せさう せさう せさう せさう
浪打 際も せさう 暮の せさう 再び 子伊太を 引と らぬ 刀 休
まが 須臾 候と ぬ 縦令 お道 の 捕へ とも 念 せさう
働さし せさう お梅が 首を 討の せさう 家も 道具も 焼 拂
つゝ 十両 せさう の 金 取の せさう 元直に せさう ぬ 横は せさう
伯母が 命の 望し せさう 約束 せさう の 内 褒美 せさう
言ふと 子伊太の 所ら せさう 念を せさう 褒美の 望し せさう
お道が 首を 討の せさう 其の せさう 約束の 耳を 揃へて 金
渡さん 先夫 せさう と言ひ せさう 取ら せさう 袖を 振 せさう

艮兵引連を馳行を止らうわつ細六が叱然として
見送るうら後ろに旅来る伴の老女涙のまぬ声あつた
此細六が人でうか主に縁の梅さぬと縁で噂ふ
こがらの金に目とくまてよくもお首を討つよる其返報が
仕度にも身へ裸練の此細目解て致やと身せのぐくせ
細六見つ冷笑の俺金ゆけの邪すまる老痴冥の纏
ひよるぬうちト言ひつ四辺を見まへて幸ひ那る櫛
船へと獨り鎖まりの婆とを小股のあつと櫓抱さる間
はるまぎう櫓船の仲へ其俵投込んで櫓あつと打切りつ

船先とつめて二三間澳の方へと突出せ折しも
引浪の捲流まうくと思ふ間小鳥夜ふれれが
忽地見えどりのみける迹見送つて細六のたも
打嘆つ稍去んとまるわう後方に望ふひさりの
處女短刀の鑑と丁と取り引戻さして細六の
うらうら梅りさるも時しも海へさう登る廿日
代め互ひの類と見合せて因へ和女の郷の茶
後間を休むひ茶店で會う怪しひ女然り
休も折る次四心り過らる俺大切る小色と
女賢五輯の二
〇十八

田の旅色物久らまて打放きは差とたつり夕暮の人立
 多き川端ゆ了に好勝せ見失ひ尋ね他ふとらうりけも
 這処で再び藍花田色とて戻せとさう出さる先と辨入
 折とそり出でて右ら雲み入る影るさ月み細六の海と
 跡と引つたがー迹圖まして遊ゆを處女の領奥本意を
 げぬ迹見かりつ惶ふぬ什麼此處女の信者ぞ去る日六
 浦の瀨門村めて危窮の場所と折後て友みくる是ー
 一賢女りの八代とぞ知まきける 村田

貞操婦女八賢誌七編中

